常光寺報

2015年

報恩講法要

十二月五日(土)

昼一時半～四時

本願寺勧学寮頭

講師　徳永 道雄　和上

十二月六日(日)

朝十時半～十二時

法話　当山住職

十二月六日(日)

昼一時半～四時

川崎市　高願寺

講師　宮本義宣　住職

＊　六日のお昼にはおときがあります。親鸞さまと一緒にいただきましょう。

ご講師の徳永道雄和上には、この一年すっかりお世話になりました。大変お忙しいのに三回もご縁をいただいて、勿体ないことです。

「有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや」とあります。不思議のご縁に感謝したいと思います。

報恩講はお寺で一番大事な法要です。地方では、各々自分の家でも報恩講をつとめる所があるくらいです。

二日目の宮本義宣先生は、去年の永代経法要にもご出講くださいました。法要は二日間ありますので、どうぞ、ごゆっくりお参りください。

『何事を聞くにつけても祖師の恩弥陀のお慈悲をしらせたまわば』

本当に、親鸞聖人に遇うことがなかったら、本願の念仏を知らずにさ迷っていたにちがいありませんね。

本堂の扁額

本堂の中の左壁に扁額がかかっていますが、これは柏市にある曹洞宗、龍泉院のご住職が本堂大修復の完成祝いとしてお贈りくださったものです。

『如是我聞』と書かれています。しかも、本願寺第二十二世鏡如上人（光瑞）の弟の尊由さまの直筆です。

「だから、あなたのお寺にあった方がいいと思って、表装を直してから送りますよ」と言って、お贈りくださいました。龍泉院は和子(坊守)の母の叔母さんが嫁がれたお寺ですが、また、和子の母も常光寺に嫁ぐときに、龍泉院の養女として縁組をしてから嫁入りをされたと聞いています。

昔は、ずいぶん堅苦しかったんですね。

自己を知る

仏法を聞くということは自己を知ること、すなわち、人間というものを知ることに尽きると思います。それは自分で自分を知ることではなく、仏さまがご覧になる「私」というものはどんな人間なのかを聞かせてもらうことです。「自分のことぐらい自分がよく知っている」と言われてしまいそうですが、以外や、灯台下暗しで、実は自分のことが一番分からんのではないでしょうか。

フランスの画家ポール・ゴーギャンの畢生の絵は、

「われらはいずこより来たるや。われらはいずこへ行くや。われらは何者なるや。」がテーマであったといいます。これは人生の最も本質的な問題で永遠のテーマとも言えますが、しかし、私たちはそのテーマを深く考えもせず、ただ快楽を求めて生きているのではないでしょうか。それにしても、どこから来て、どこへ行くのかも知らずに生きているというのは、考えてみれば不気味な話です。まるで電車に乗り合わせたものが、「どちらからですか」と声をかけられて、「さあ！」と応え、「どちらへ行かれますか」と尋ねられて、「さあ！」と応えているようなものですから。――そんな浅はかな頭で自己を本当に知ることなどできるはずがありません。

せいぜい私たちが知っているのは世間の出来事や情報、自分の能力ぐらいのものです。それだって上辺だけです。しかも、私たちの目は煩悩に覆われていて、なんでも自己中心的にしか見ることができません。そんな偏った目で自分を正しく見るということは不可能なことと言えるでしょう。

しからば、仏さまは私たち人間をどのようにご覧になっているのでしょうか。「仏かねて知ろしめして『煩悩具足の凡夫』と仰せになられた」とあります。また、「超世の悲願聞きしより　われらは『生死の凡夫』かは」と詠まれています。私たちは「煩悩具足の凡夫」であり、しかも、「生死の凡夫」であるということになります。

そこをしっかり聞かせてもらうのが仏法聴聞ということです。ところが、煩悩の話をすると、「そんな人いますね」と他人事のように言う人がいます。また、「煩悩はあってもいいんでしょ」とか、「あたりまえでしょ」などという人もいます。

煩悩こそが私たちの生活のあらゆる苦悩の本なのに、どうして「あってもいい」などと言えるでしょうか。親鸞聖人は煩悩の身を悲しまれています。